

我が国唱歌教育の変遷

浅野 常七

一、明治初期

我が国初等教育に唱歌なる教科が生れたのは明治五年であるが、教える教師もいないし、教材も無かったので、実際には唱歌は行われていなかったのである。

後に東京音楽学校の前身音楽取調掛の初代係長になった伊沢修二は、音楽教育調査の為アメリカに留学（明治八年～十一年）、帰朝後其の師であったボストンの著名な音楽教育家メーソン（Luther Whiting Mason）（一八二八～一八九六）を招聘して唱歌の編集、指導者の養成をさせた。

ここに三冊よりなる日本最初の唱歌教材集が発刊された。

小学唱歌集初編（明治十四年十一月二十四日刊行）

同 第二編（明治十六年三月十八日刊行）

同 第三編（明治十七年三月二十九日刊行）

伊沢修二は発刊に際し凡そ次の様なことを述べている。

「凡そ教育の要は徳育知育体育の三者に在る。特に小学校に在っては徳性を涵養することが必要である。特に音楽は人の心を正しくし、世の中を美化する助けになる。故に昔から明君賢相といえる人は特に音楽を振興し国中に広めようとした。このことは和漢欧米の歴史を繙けば明らかである。その故に我が政府が初めて学制を頒つに当って、唱歌を普通学科中に掲げて一般必須の科であることを示し云々。」

この唱歌集の主意及び内容は、日本固有の音楽に西洋の音楽を取入れ、和洋折衷の形の新しい曲を作り、やがては両者が渾然と一体となった国楽を創造することが狙であった。

初編中の「蝶々」及び「螢」二編中の「霞か雲か」三編中の「仰げば尊し」「才女」「菊」の様に外国の民謡から採ったものもある。

歌詞は当時の著名な国文学者が作詞した。猶我が国固有の音楽である雅楽の律音階及び俗楽の陰音階のものも作曲されている。

以上の二つの音階によって作られたものに、第三編中の「四季の月」

及び「富士筑波」「園生の梅」等がある。この小学唱歌集は当時としては我が国唯一の教材集だったのであった。

明治二十年十二月「幼稚園唱歌集」(音楽取調掛編)(全一冊二十九曲)が発行された。幼児向の唱歌集が発行されたのはこれが初めてであるが、歌詞が文語体であったため幼児には難解であった。

「風車」(かざぐるま風のまにまにめぐるなりやまずめぐるもやまずめぐるも) 雅楽の律音階による、作詞作曲者不明。「数えうた」(一つとや人々一日も忘るなよ忘るなよはぐくみそだてしおやのおんおやのおん) 江戸時代のわらべうたから採り俗楽陰音階が用いられている。

以上の二曲の様な内容の曲が含まれている。明治二十三年小学校令の改正によって小学校の教科書は検定教科書に限られるようになり、音楽教科書も以後検定教科書が使われる様になった。

明治二十一年より二十三年迄の間に「明治唱歌」(六集)が発行された。この中には「故郷の空」(夕空はれてあきかぜふき、つきかげ落ちて鈴虫なく)これはスコットランド民謡に大和田建樹が作歌した。

「来たれや来たれ」(きたれやきたれいぎきたれ皇国をまもれやもろともに) 外山正一作歌伊沢修二作曲「あわれの少女」(吹き捲く風はかおを裂きみるみる雪は地にみちぬ) 大和田建樹作歌フォスター作曲 同じ作歌による「旅泊」(磯の火ほそりて更くる夜半に岩うつ波音ひとりとたかし) 以上の曲は当時の青年子女に盛んに歌われ現在迄も歌い続けられている。中でも旅泊は「燈台守」という題で小学校の教材として盛んに歌われている。

小学唱歌集を編纂した伊沢修二は、西洋の音階フランス式数字符(1 2 3 4 5 6 7)を「ヒフミヨイムナ」と読み、猶ヨとナを抜いた「ヨナ抜音階」(又の名を「ヨナ抜節」ともいう)を盛んに使った。この明治唱歌にもこの五音音階による「霞む夕日」「舟あそび」等が広く歌われた。又、外国の民謡に歌詞を新作した歌曲も数多く挿入されている。

明治二十二年「中等唱歌集」(一冊)が発行された。編纂は東京音楽学校(以前の音楽取調掛)で当時は最も漸新な歌曲集であった。「織り成す錦」(織りなすにしきさくらにすみれいばらにばたん春こそよけれ)「埴生の宿」(埴生の宿も我が宿玉のよそいうらやまじ) ビショップ作曲の「楽しきわが家」に里見義が作詞したものである等。

これより先、明治十三年日本に始めて国歌「君が代」が制定された。(林広守作曲エッケルト編曲である)。続いて明治二十六年儀式唱歌として「一月一日」「紀元節」「天長節」等が制定され発令された。後、昭和三年明治節が制定告示されたが、いづれも昭和二十年終戦迄永い間国民によって歌われた。このように次々と歌曲集が出版され学校唱歌も段々と隆盛になってきた。

二、明治中期

明治二十七、八年の日清戦役及び三十七、八年の日露戦役に影響されて、歌曲も軍歌調一辺倒になった。当然学校唱歌教材も勇壮な中に少し感傷的な趣の歌曲が盛んに作られ出版された。前に述べたようなヨナ抜音階がこの頃盛んに用いられ、又、マーチ風の調子の歌が多く

作られた。

明治二十八年山田源一郎編の「大捷歌」一編から七編迄の中に掲載された、「勇敢なる水兵」(煙も見えず雲もなく)「雪の進軍」(雪の進軍氷を踏んで)「軍艦」(守るも攻むるもくろがねの)「日本陸軍」(天に代りて不義を討つ)「橘中佐」(遼陽城頭夜は更けて)「戦友」(こころは御国の何百里)「水師營の会見」(旅順開城約なりて)等がある。

以上の歌はいずれも文部省検定済で戦意昂揚の役目も果たした訳である。猶、従来の歌曲に軍歌調の歌詞をつけて歌った所謂、替歌も相当流行した。以上の歌曲は勿論、学校教材として用いられた。「荒城の月」及び「箱根八里」の作者として有名な滝廉太郎は明治三十四年「中学唱歌」に以上の名曲を載せ次々と創作を発表した。同時代の田村虎蔵は明治三十二年東京高等師範学校付属小学校在職中に小学唱歌集中にある文語体の歌詞が、小学生に難解であることを痛感し小供に適した歌詞と曲を備えた歌曲を作ることを考え、実践した。所謂、言文一致唱歌である。納所弁次郎・石原和三郎等が作曲家、作詞者としてその運動に協力した。かくして明治三十三年「幼年唱歌」を世に出し、続いて三十六年「少年唱歌」を出版した。前者は第一集より十集(十冊)迄で後者は第八集迄あり尋常小学校(四年制)に「幼年唱歌」を、高等小学校(四年制)に「少年唱歌」を指導した。いづれも言文一致の歌詞による唱歌で、当時の音楽教育界に大センセーションを巻き起したのである。

以上 唱歌集は歌詞及び曲の難易により小学校、高等小学校の各学年にほぼ配列をした様子であるが、当時の学校唱歌の教材は各学年共

通に教えられるもので、歌詞、曲共に系統的に編纂されていないという欠点があった。

以上の欠点を充たす考えのもとに納所弁次郎、田村虎蔵共編「尋常小学唱歌」(明治三十八年)(全十二冊)大橋銅造、納所弁次郎、田村虎蔵共編「高等小学唱歌」(明治三十九年)(全八冊)前者は小学校(四年制)各学年三冊づつ、後者は高等小学校(四年制)各学年二冊づつ配列され、内容も修身、国語だけの題材以外に地理、歴史等の教科迄非常に広範囲になっている。以上の唱歌集は全国的に使用された。

「うさぎとかめ」(もしもしかめよかめさんよ)「大こくさま」(おおきなふくろをかたにかけ)「一寸法師」(ゆびにたりないいっすんぼうし)等が特に知られている。

明治三十四年「中学唱歌」(三十八曲)が出版された。

「寄宿舎の古釣瓶」(作詞者不明、小山作之助作曲、縄こそ朽ちたれこの古つるべ桶こそいたためれこの古つるべ)

「箱根八里」(鳥居悦作詞、滝廉太郎作曲)(箱根の山は天下の嶮函谷関も物ならず)「荒城の月」(土井晚翠作詞、滝廉太郎作曲)(春高樓の花の宴めぐる盃かげさして)等があり、当時最もとより現在に至る迄愛唱されている。当時の唱歌指導法は前に述べた「ヒフミヨイムナ唱法」によったものと考えられ、(1234567)の数字符、所謂、略符を使用するか僅かに本譜を使用したようである。

指導の方法も、一斉教授法から次のような三段階的教授法を取るのがよいとされていた。

予備（呼吸練習、音階練習、歌詞素読）

示範（教師の範唱により、楽句ごとに区切って歌い、後に全部を歌う）

練習（楽句ごとに区切って歌い後全部を通して歌う）

其間、個々に歌わせたり、何人かで、又は全員で歌うという方法がとられた。とに角當時の唱歌の指導は歌曲を歌う以外は歌詞について教師と生徒の問答があった程度で歌唱することが、すべて中心であった。低学年は口授法で小学三年頃より数字符により指導し、其後、本譜による方法が當時のかなり高度の教育方法であったようである。

明治の末頃には、大体本譜に移行したようである。

三、明治末期

明治四十二年五月「中等唱歌」（東京音楽学校編）が発行された。

「胡蝶」（鳥居枕作詞、ドイツ民謡）

「氷滑」（乙骨三郎作詞、ドイツ民謡）

「湖上の月」（吉岡郷甫作詞、ロッシーニ作曲）（月影さやけく風も吹かぬ秋の夜半）

「ウオーターロー」（土井晚翠作詞、山田源一郎作曲）（渦巻く硝煙飛び散る弾雨）

この歌曲集の中には以上の歌曲のように外国の曲に新しく作詞した曲もあったが、いづれも広く愛唱された。

明治四十三年七月始めての文部省編集の「尋常小学読本唱歌」（全一冊）が発行された。その内容は、文部省編纂の尋常小学読本唱歌中

の歌詞に、特に文部省に設置された編纂委員によって作曲されたものである。全部で二十七曲、その内「かぞへ歌」は古来のわらべ歌で他は新に作曲されたものである。からす、つき、こうま、ふじの山、春が来た、虫のこえ、日本の国、かぞえ歌、いなかの四季、水師營の会见、われは海の子、鎌倉、其他である。

ついで「尋常小学唱歌」（全六冊）が全部新作の曲で発行された。作詞は芳賀矢一・上田万年・高野辰之・武島又次郎・佐々木信綱・吉丸一昌以上の国文学者である。作曲は湯原元一・上真行・小山作之助・島崎赤太郎・田村虎蔵・岡野貞一の諸氏である。

「第一学年用」（明治四十四年五月）（全二十曲）日の丸の旗、鳩、人形、かたつむり、牛若丸、桃太郎、池の鯉、月、花咲爺等。

「第二学年用」（明治四十四年六月）（全二十曲）二宮金次郎、小馬、浦島太郎、案山子、富士山、紅葉、雪、梅に鶯、母の心、那須与一、等。

「第三学年用」（明治四十五年三月）（全二十曲）春が来た、茶摘、汽車、虫のこえ、村祭、冬の夜、川中島、日本の国、豊臣秀吉、港、冬の夜、川中島、かぞえ歌、等。

四、大正時代

「第四学年用」（大正元年十二月）（全二十曲）春の小川、いなかの四季、桜井のわかれ、村の鍛冶屋、靖国神社、雲、広瀬中佐、たけがり、橘中佐、等。

「第五学年用」（大正二年五月）（全二十曲）みがかつば、金剛石、

舞えや歌えや、鯉のぼり、管公、朝月は昇りぬ、日光山、海、大塔の宮、冬景色、水師營の会見、三才女、等。

「第六学年用」(大正三年六月)(全十九曲) 明治天皇御製、臘月夜、日本海海戦、我は海の子、故郷、灯台、児島高德、等。

猶以上の歌曲の内前出の小学読本唱歌に載っているものをそのまま載せたものもあるが、他の歌曲の歌詞は修身、国語、歴史、地理、理科、実業等の種々の教科書から適当な題材を求め又、文体用語等ではできるだけ読本との歩調を合せるよう考慮がされてある。

五、昭和時代

昭和五年五月小山作之助、島崎赤太郎、岡野貞一、乙骨三郎、高野辰之等の編集委員によって、「高等小学唱歌」(全一冊)(二十九曲内二部合唱曲四曲を含む)が発刊された。

尋常小学唱歌が発行されたのは明治末年から大正初年度なので昭和年代になってかなり年数の隔りがあったので音楽教育の進歩と時代の要求もあって改訂の必要が生じたので、「尋常小学唱歌」教材の外に数曲の新作を加えて訂正発行し、猶教師用として伴奏付の別冊を発行した。これが「新訂尋常小学唱歌」である。

昭和七年の三月から十二月迄の間に第一学年より六学年迄発行された。編集委員は東京音楽学校教授の信時潔、片山穎太郎による。

一学年用の教材中「電車ごっこ」(運転手は君だ車掌は僕だ) 二学年用の教材中「ポプラ」(高い空につつ立つポプラ夕日にもえて枝々の) 三学年用の教材中「螢」(螢のやどは川ばた楊柳おぼろに夕やみ

寄せて) 四学年用の教材中「動物園」(動物園ののどかな午後は孔雀がすっかり得意になって) 「牧場の朝」(ただ一面に立ちこめた牧場の朝の霧の海) 六学年用の教材中「遠足」(鳴くやひばりの声うららかにかげろうもえて野は晴れわたる) 「スキーの歌」(輝く日の影はゆる野山) 以上の歌曲は例として上げたのであるが、各冊七曲から十二曲の新曲が加えられた。昭和十年三月同じ編集委員によって「新訂高等小学唱歌」(全六冊)が発行された。

十九世紀後半から二十世紀のはじめにドイツを中心として起った芸術教育思潮が大正初期我が国に紹介されて、小学校の芸術教育方面に活発な運動が展開された。以上のような風潮を受けて起ったのが童謡の流行である。もっとも明治以後の学校唱歌は、実際に小供の日常生活とは懸離れていると感じていた人もいたことから大正七年童謡童謡雑誌「赤い鳥」が発刊されたのが契機となり、新しい子供の歌、所謂、童謡が作り出されたのである。これらの童謡のなから文部省が検定を認可したいくつかの曲もあるが、あまり歓迎されたとばかりは云えない点もあった。

音楽教育者の中には童謡に対して批判的な人達もかなりあったが、とに角当時は大変な勢いで流行した。ただその中には非常に立派な童謡も多かったが、低俗なものもあって世の人の顰蹙を買った点もあった。学校の音楽教材に満足しない人々には大いに歓迎され、学校外で盛んに歌われた。

「金魚の昼寝」(赤いべべ着た可愛い金魚) 「靴が鳴る」(お手々つないで野道を行けば) 「雀の学校」(ちいちいばちいばち)

以上、弘田竜太郎作曲。

「黄金虫」(黄金虫は金持だ)「背くらべ」(柱のきずはおとしの)以上中山晋平作曲。

「どんぐりころころ」(どんぐりころころどんぶりこ)梁田貞作曲。

「夕焼小焼」(夕焼小焼で日が暮れて)草川信作曲。

以上の童謡は特に小供達に親しまれた歌である。

前出の尋常小学唱歌や童謡に刺激されて民間から出版された検定教科書が次のものである。

昭和六年「新尋常小学唱歌」(全六冊)

昭和七年「新高等小学唱歌」(全二冊)

いづれも日本教育音楽協会編。

昭和七年「小学新唱歌」(全六冊、日本音楽研究会編)

昭和九年「最新昭和小学唱歌」(全六冊、日本教育唱歌研究会編)

昭和十年「児童唱歌」(尋常科用全六冊、日本教育音楽協会編)

同年「新日本唱歌」(尋常科用六冊、高等科用二冊、初等音楽研究会編)

同年「新撰尋常小学唱歌」(全六冊、小松耕輔、梁田貞、葛原幽共編)いづれも文部省検定済。

明治から大正年間の音楽指導は専ら歌唱指導が主であったが、前に述べた軍歌や当時の書生の寮歌等に似た歌い方をするものが多く学校の唱歌の歌い方も、所謂、地声(胸声で唱う歌い方)で唱う習慣がついていた。

昭和四年筆者が、東京府青山師範に職を奉じた時、当時、青山師範の

音楽の先生であった福井直秋先生(後、武蔵野音楽大学の初代学長となる)がこのことに非常な関心を持たれて、中声の歌い方と称した方法を研究され、当時、附属小学校の教諭であった吉田照十方氏にこの方法による唱歌の授業の研究を命じられた。そのため全国から毎日のように参観者が列をなして大変な評判になったことがあった。その方法はいく点ホ音から下を胸声区それから上二点ハ音迄を中声区その上を頭声区としたが、実際は一点ホ音より上は頭声区と云える。胸声は所謂、俗に地声という程で、強い声又はどなる声いいかえれば無理な発声である。中声区(実際は頭声区)を歌う要領で発声すれば声帯の全幅が振動しないから弱い声、つまり無理のない発声で歌えるので中声の発声の要領で歌う方法によるのが、最良の歌い方であるとの主張である。だが実際には中声区という声区はなく胸声区と頭声区の二つの区分があるだけである。

然し以上の方法による場合は声は弱く楽器で云えば弱音器をつけたような音になり弱々しい歌い方になるので、頭声の歌い方でも、猶適当な強い音も出した方がよいという意見も出て相当強い声も出した方がよいというようになり改善された。音階を歌う場合もいつも上向するだけでなく上の音から下向するなど色々な発声上の注意がはらわれた。

昭和十六年四月より国民学校令が施行され、国民学校と改制され、今迄の唱歌科は「芸能科音楽」と改称された。今迄の徳性の函養情操の陶冶は国民的情操に変へられ、国家的教育を徹底させる目的のために一路邁進したかの観があった。

今迄の唱歌は、芸能科音楽となり、鑑賞や器楽の面も取り入れられるようになった。音楽も精心の高揚に役立たせることを目標としていたことは事実であった。

昭和十六年三月刊「ウタノホン」(上)

国民学校初等科第一学年用(全二十一曲)

きみが代、がっこう、ひの丸、ゆうやけこやけ、えんそく、かくれんぼ、ほたるこい、うみ、おうま、お月さま等。

同年刊「うたの本」(下)

国民学校初等科第二学年用(全二十二曲)

きげん節、春が来た、さくらさくら、国引き、軍かん、雨ふり、花火、たなばたさま、うさぎ、長い道、朝の歌、富士の山、菊の花、等。

昭和十七年三月刊「初等科音楽」(一)

国民学校初等科第三学年用(全二十六曲)

子供の八百屋、軍犬利根、稲刈、春の小川、鯉のぼり、天の岩屋、山の歌、田植、なわとび、潜水艦、餅つき、軍旗、手まり歌等。

初等科音楽(二) 同年刊

国民学校初等科第四学年用(全二十六曲)

昭和十八年二月刊、初等科音楽(三)

初等科第五学年用(全二十七曲)

朝礼の歌、大八洲、忠霊塔、赤道越えて、麦刈り、海、戦友、揚子江、大東亜、牧場の朝、聖徳太子、秋の歌、捕鯨船、特別攻撃隊、母の歌、冬景色等。

同年刊、初等科音楽(四)

初等科第六学年用(全二十七曲)

敷島の、おぼろ月夜、姉妹、日本海海戦、晴れ間、四季の雨、われは海の子、満洲のひろ野、肇国の歌、体練の歌、落下傘部隊、御民われ、船出、鎌倉、少年産業戦士、スキー、水師営の会見、早春、日本刀等。

昭和十九年四月刊、高等科音楽(一)

国民学校高等科第一学年用(全十九曲)

海ゆかば、青年の歌、八紘為宇、麦うち歌、元寇、大地を耕す、白虎隊、木枯の朝、落日、空を護る、児島高德、機械に生きる、学びの庭に、等。

昭和十九年四月刊、高等科音楽(二) 女子用

女子青年の歌、大地を耕す、ますらおの母、しろがねも、等。

高等科二年用男、女子用共発刊されることなく終戦となった。

これより先、昭和十三年頃から十五年頃にかけて、日本放送協会の出版による国民歌謡がラジオ放送等により一般に広められた。叙情的な歌もあり新鮮な曲想と勤労意欲を振興させるような歌もあり、一般家庭はもとより職場、学校等でも盛んに歌われた。特に昭和十五年は紀元二千六百年の奉祝で、国中が沸立った時なので、国民の士気を昂揚するような国民歌謡が盛んに歌われた。民間の報道関係だけでなく内閣情報部が積極的に普及に乗り出し戦時色の強い歌が歌われた。

朝(島崎藤村作詞、小田進吾作曲)

椰子の実(島崎藤村作詞、大中寅二作曲)

むかしの仲間（木下全太郎作詞、山田耕筰作曲）愛国の花（福田正夫作詞、古関裕而作曲）日本刀の歌（西条八十作詞、小田進吾作曲）大日本の歌（芳賀秀次郎作詞、東京音楽学校曲）愛国行進曲（内閣情報部作詞、瀬戸口藤吉作曲）以上は代表的な国民歌謡及び国民歌である。

昭和二十年八月十五日終戦を迎え、翌二十一年五月国民学校教科書より不適当なものを省略して暫定的な初等科用六冊、高等科用一冊の教科書を発行した。翌二十二年教育制度が変り六・三制が施行され国民学校は廃止され、従来の小学校となったのである。昭和二十二年に文部省から示された学習指導要領には従来の徳性の涵養の目標を強く打出さず、美的情操と豊かな人間性を養うということを挙げている。二十六年、三十三年の指導要領の改制があったが、いづれも音楽経験を通じて豊かな人間性と美的情操を養うことを上げている。

昭和二十四年以後は、文部省の教科書は廃止され各出版社より発行される検定教科書が各学校で用いられるようになった。

結局、従来歌われて来た歌曲は大体は似たような材量であるが、編著者の苦心によって数多くの検定教科書が発刊され各学校に使用されている。